

特集 日系文化研究

日系アメリカ文学における二つの文化の 葛藤とその変容の歴史的研究（2）

彦 坂 佳 宣

はじめに

この研究は、日系アメリカ人の文学と言語を日米両文化の葛藤とその変容という視点から、日系アメリカ人の文学活動と言語活動を歴史的に考察し、それらの到達点を明らかにすることを目的としているものである。

すでに本誌8巻5、6合併号に、特集（1）として言語活動についての2論文、一世文学について1論文を世に送ったが、今回その続篇として、二世・三世の文学について考察した論文を掲載した。

特集（1）にも記されているが、日系アメリカ文学およびその言語的側面は、近年その重要性が認識され、多くの研究があらわれて来ている。こうした中でわれわれの研究は、一世から三世、場合によっては四世におよぶ日系人の文学活動を日米二つの文化的な葛藤という視点から解明しようとしたところに特色があると考えている。

今回掲載の山本論文は、二世作家トシオ・オリの諸作品を本研究のテーマの視点のもとに考察したものである。まずトシオ・モリの作品を網羅的に集めるという書誌的な、しかし地道な作業があり、その上で作品内容そのものの整理と二世世代の歴史的・社会的経緯にたって諸作品を時代区分し、彼のアイデンティティの認識を時代ごとに社会とのかかわりにおいて解明し、作品および作家に対する評価に及んでいる。詳細は論文につかれないが、従来の「日常生活の中に普遍的な人間を描いている」という評価の一方で、二世のアイデンティティの表現がどのように見られ、日系人あるいはマイノリティーという位置から日・米をどう認識するかという問題が論じられている。そして、やはり二世作家ヒサエ・ヤマモトの場合も参考にしながら、彼の独自性や限界とも言える面に言及している。

桧原論文は、日系三世の文学の例として Holly Uyemoto の作品を論じている。Uyemoto 自身は日系四世であるが、その作品 *Go* は日本的な価値観をもつ家族の中で

成長する三世の姿を描いたものである。その作品名の *Go* も英語と日本語の両義性を示唆するものである。

桧原は、日本的な価値観をもつ母に反発して生きる三世が、ある時点で母と和解する過程を追い、日米文化をめぐる両者の葛藤の模様を考察している。ただそれは、もはや日・米どちらかといった視点ではなく、歴史を学ぶ主人公による日系人史への認識の面、母の中にもアメリカ的な面が内在することを認める態度、他のマイノリティーとの連帯の側面などが考察されている。そして、日系文学も時代を経るとともに次第に作品世界の広がりを見せているという。

以上、(1)(2)の報告によって我々の研究報告は一応終了する。もとより、対象とした作家・作品あるいは日系人は、種々の事情からその一部であることをまぬかれないが、しかし個別の考察の中にこのテーマの骨格を見通す視点を掲げてきたつもりである。

まだまだ発掘されていない多くの作家や作品、およびその底辺を支える日系人の言語的な諸事情についての事例的研究を重ねていく必要があることは言うまでもないが、ここに掲載したいくつかの考察をさらに継続的に進めていけば、やがては日系文学の今日的な特徴とその到達点がさらに具体的な像として結実するものと思う。

付記

本研究は、「1994・95年度立命館大学学術研究助成国際共同研究」の成果である。